

尊は、七四五点である。これらの授与者のうち、一には、講中に対して授与したものは四五点。二には、日扇の門弟に授与したものは一四点。三には、信徒に授与したものは六八六点、と三種類に分類できる。さらに三の信徒については、細かく分類してみると、以下のAからEに示すことができる。

まずAは、男性の信徒に授与したもので五三三点確認できる。このうち信徒が所属している講中の名称も含めて記載されているものは二六八点である。また授与者の氏名のみは二六五点であり、講中名・氏名の記載と、氏名のみ記載の数はおよそ同じである。

ついでBは、女性の信徒に対して授与したものである。その数は九二点であって、男性信徒の授与数と比較するとその数が少ないことがわかる。この九二点のうち、所属する講中名と氏名の記載があるものは三五点、氏名のみは五七点確認できる。

つづいてCの分類は、一点の本尊に対して授与者の記載が二名あるものが六点みられる。この分類には、夫婦に対しての授与であったり、あるいは日扇が最初に授与した信徒の名前に、さらに他の信徒の名前を追記して授与しているもの、あるいは授与されたのが事情により、その信徒の名前を修正して再び授与しているもの等がある。

つぎにDの「不詳」は計一五一点が知られる。この分類には、授与者の記載が名字のみで性別の判断が出来ない本尊が一二点、あるいは『御本尊集』に写真の収録はなく記録のみで、授与者の存在は知られるものの名前が明らかにされていないものは二点、あるいは本尊が破損等して授与者の判読が困難な

ものは一点である。

さて、最後のEの分類は、授与者名が抹消されているもので計四〇点確認できる。すなわち、日扇によって記された授与者名が事情により墨などで塗りつぶされているもの、あるいは名前の記載部分が切り取られ、その箇所に別の紙を貼付して修復しているものが確認できる。しかも、その一部の本尊には修復した箇所に他筆で授与者名が明記されている。

このようにみえてみると、日扇の曼荼羅本尊にみる授与者は、大別三種類に分類でき、信徒の分類においては五種類、さらに小別五種類に分類されることが確認できるのである。

なお、日扇による授与者の教導については、今後の課題としたい。

藤井日達の仏教アジア主義と

マハトマ・ガンディーの近代文明批判

外川 昌彦

本報告では、戦前の日本山妙法寺のアジア布教の展開を、山主・藤井日達(一八八五—一九八五)のインド認識の形成を通して検証し、近代の日本仏教でもユニークなインド布教を実践した藤井のアジア認識を跡付けるものである。特に、透徹した近代文明批判で知られるガンディーの著作、『ヒンド・スワラージ』(インド独立)への藤井の思想的共鳴が、ガンディーとの出会いを導く契機を与え、それによって日本山の活動領域も、大陸布教の範囲を超えた英領インドへと展開してゆくものと考えられる。そのため、藤井のガンディー思想との出会いを、本

報告では、通説とされる一九三三年のガンディーとの会見ではなく、それに先立つ一九三〇年の日本橋・白木屋での辻説法にあると考える。

日本山妙法寺は、藤井日達が一九一七年に単身で中国での大陸布教に従事し、一九一八年に大連で創建した新興の仏教教団である。現地の人々への布教を通して教団を創設し、戦前の大陸で二〇か所以上の道場を建立する。一九二三年の関東大震災を機に帰国し、静岡県田子の浦に日本では初めての道場を建てる。その後、約七年間に一七か所の道場を建立し、教団としての基盤を固める。しかし、一九三〇年には約七年間のインドへの布教に出立し、再び、日中戦争の拡大を受けた一九三八年に帰国してからは、日本と大陸との間を往復する、という活動を行った。近代の日本仏教によるアジア布教の多くが、東アジアでの日本人への「追教」に力を入れていたのに対し、日本山は当初から、現地の人々への布教を行い、特にインドを対象としていた点で、アジア布教の歴史においても興味深い事例となっている。

インドにおける藤井日達は、一九三三年にガンディーと会見し、その後、親密な交流を結んでいた。かつて報告者は、ガンディーによる日本の帝国主義政策への厳しい批判にも関わらず、仏教者としての藤井への理解と信頼関係の構築が、その両者の交流を可能とした背景にあることを指摘した(「ガンディーと共に暮らす——一九三〇年代の日印関係と藤井日達のインド体験」『東洋文化研究所研究紀要』第一五九冊、二〇一一)。しかし、多くの先行研究が指摘するように、日本軍の大陸進出

と歩調をあわせて大陸布教を進めた日本山の戦争との関わりという問題は、ここではなお残された課題となっていた。

報告では、そのため近年の日本仏教のアジア布教に関わる議論から、特に「仏教アジア主義」への視点を手がかりとして、日本山のアジア布教の問題を、ガンディーとの交流を通して形成される藤井のインド認識という観点から再検討する。

具体的には、藤井の辻説法から、(1)関東大震災を、物質文明にとらわれ、精神文化をおざなりにした日本人への警告として捉え、(2)西洋の物質文明と東洋の精神文化という図式的な構図を、より普遍的な文明批判を通して捉えなおすという、二つの論点を指摘する。

特に後者について藤井は、ガンディーの『ヒンド・スワラージ』における文明批判を踏まえることで、①弁護士という職業の矛盾、②近代医療の矛盾、③文明の利便性の矛盾に基づくことで、観念的な西洋文明批判を超えた、より普遍的な近代文明への批判を導き出してゆく経緯を指摘する。藤井は、近代文明を批判する『ヒンド・スワラージ』の著者としてのガンディーに言及することで、仏典上の「天竺」を、ガンディーの視点を通して植民地支配に苦しむ歴史上の「インド」に接続し、西天開教というインド布教の実践命題を導き出してゆく。藤井のインドでの活動が、こうして単なるインドでの布教にとどまらず、インド独立運動の精神的支柱としてのガンディーへの結縁を通したインド仏教の復興という、新たな意義を獲得してゆく経緯が検証される。